
オレンジ

愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレンジ

【Nコード】

N3308A

【作者名】

愛

【あらすじ】

彼は、兄の友達。彼は私の2歳上。彼は、とってもモテた。そんな彼と出会った私の運命が、少しずつ変わっていく。これは私の永遠の想い。

プロローグ（前書き）

この小説の大半は、私の体験を元に書いています。

ブログ

たったの2歳さ。

その上お兄ちゃんのお友達。

そして私の素直じゃない性格。

この3つは、私にとって大きな壁となって立ちはだかった。

小学生 1

小学一年生 5月6日

初めて島岡君と会いました。

その日、私が学校から帰ると、家の中が騒がしかった。新しい生活で神経をすり減らす毎日。もともと人付き合いが苦手だった私は、友達とどう接していいのか分からず、騒ぐ友達を前にして少し気後れ気味だった。そんな学校から帰って、家の中が騒がしいと、誰だって嫌な気分になるだろう。もちろん私も例外ではない。

「ただいま」

「おかえり」

少し遅れてお兄ちゃんが返事をしてくれた。お兄ちゃんは私の二個上で、当時小学三年生。まだまだ背は低かった。

狭いマンションの中に、笑い声が響く。私はその声に向かって歩き出した。お兄ちゃんの友達を見てみたかったのだ。それに、自分の部屋に一人で閉じこもってられるほど、私は大人ではない。

私はその笑い声に戸惑いながらも、ゆっくりとリビングのドアを開けた。

「…こんにちは」

私がリビングに入ると、いきなり声をかけられた。お兄ちゃんの友

達と分かっているながらも、反射的に声の方に顔を向けてしまった。

「……」

言葉を失った。なにせ、お兄ちゃんよりも小さかったから。でも、よく見たら可愛い顔をしてるなっと思った。

お兄ちゃんはひよろ長く、キリンみたいな人だ。それに対して彼は、当時の私にとっての王子様像にぴったり当てはまったのだ。そう、それが島岡君との出会い。

「あ、こ、こんにちは」

私が戸惑いながらも返事すると、島岡君はニツコリ笑って返してくれた。私の顔が熱くなったのが分かった。

それから、私もお兄ちゃんに誘われて、一緒にゲームをした。3人でやるゲームは、どこか新鮮で、どこか恥ずかしかった。

この出会いが、私の運命を少しずつ変えることになるとは、思ってもみなかった。

小学生 1（後書き）

新作です。またまた恋愛ものになってしまいましたが、あきない様に頑張ります。よろしくお願いします。更新するたびに、私の作品を読んでくださる方がいれば光栄です！

小学生 2

5月7日

いつも通りの1日だった。

島岡君に会った次の日、何も変わりのない生活がまっていた。

「おはよう、美晴ちゃん」

集団登校で、6年生に手を繋がれている私に、同じクラスの加奈子ちゃんが挨拶をしてきた。私も加奈子ちゃんにおはようって挨拶をした。その後加奈子ちゃんは、同じ班の6年生に手をひかれて、私より先に学校へ向かっていった。

私はただ、無表情で加奈子ちゃんの後ろ姿を見ていた気がする。

私たち1年生は1階、2年生と3年生は2階だ。お兄ちゃんは3年生だから、当たり前のように2階へ上がっていく。きつと、2階には島岡君もいるんだろう。私は自分の教室に行く時もずっと、階段を見つめていた。

その時、誰かが私の肩を叩いた。そつとふり向くと、そこには同じクラスの圭がいた。圭は、私にとって1番の友達だ。

「おはよう」

「どうしたの、ずっと階段見て？」

私が笑顔で言うと、圭は挨拶を返さずに、私の痛いところをついた。

「ううん、何でもないよ」

「じゃ、早く教室行こうよ」

「うん！」

圭が教室に向かってずんずん歩き出した。私もそれに続く。でも、どこか寂しくって後ろを振り向いてしまった。そこには、誰もいなかった。

午前中の授業が終った。私は席に着いたまま、ため息をつく。疲れたのもあるけど、心の何かが引つかかったのだ。

圭が、お昼を食べようと声をかけてきた。もちろん私は1人で食べるのは嫌だったから、良いよと答えた。

「美晴、今日給食当番だよ、アンタ」

「え、うそお。もしかして…」

「そ、牛乳当番だよ」

私たちの学校は、給食当番があつて、おかずの当番や牛乳当番がある。その中でも牛乳当番は、地下室まで行かなきゃいけないので、とにかくしんどい。しかも牛乳が重いときた。

「牛乳当番の人誰？」

担任の先生が、教室の中にいっぱい響くように声を張り上げた。その声に、私は静かに手を上げた。他にも3人の子が手を上げてい

た。

「早く行つてらっしゃいね」

「はぁい」

その中で、誰かがめんどくさそうに返事をした。それにつづいて、私たちは牛乳を取りに廊下に出た。

地下に行くと、そこには給食委員の人が点検をしていた。奥の方にいるから顔はよく見えない。すると、私たちが来たことに気付いた1人がひよっこり顔を出してきた。

「……！」

一瞬、言葉が出なくなった。

「あ、松本の妹じゃん」

それは島岡君だった。

「し、島岡君、給食委員だったんだね」

「うん、で、何組？」

「1組です」

「はい、良いよ、牛乳取ってって」

それから私は、クラスの友達と一緒に重たく冷たい牛乳を持って、クラスに足を向けた。

いつも通りだったけど、島岡君に会ったのだけはすごく嬉しかった。
昨日会ってなかったら、声をかけてくれなかったのかな？

小学生 3

7月18日

みかんとオレンジって、どう違うんだろう？

今日、日常に新たな疑問が生まれた。

「……」

今日は休日、学校はお休み。私は家で、大好きなみかんを食べていた。そのとき、テレビで私は衝撃的なものを見た。

そこに映っていたものは、オレンジ色の丸い形をしていて、上のほうにはヘタもあって、それは今私が持っているみかんにそっくりだった。

「……」

アナウンサーのお姉さんは、今が旬のオレンジ、皆ぜひ食べてくださいね、とてもおいしいですよ、と言っていた。

「……？」

私は、テレビに映っているオレンジと、手の中にあるみかんを比べた。どう見ても同じだ。

「…ねえお母さん、お母さん」

「なあに？」

洗濯物をせつせと洗っていたお母さんのもとへ駆けていく。

「みかんとオレンジって、どう違うの？」

私がそう言つと、お母さんは一瞬困つたような顔をした。でもすぐに、洗濯物のほうに顔を向けて一言言つた。

「その内分かるわよ。今お母さん忙しいから、向こうで大人しくしてないさい」

「はあい……」

きつとお母さんは分からなかったんだろうと思った。

次に部屋で勉強している兄の元へ向かった。

「お兄ちゃん、入るよ」

部屋に入ると、お兄ちゃんは勉強ではなくゲームをしていた。お兄ちゃんはビクツと体を震わせたけど、私だと分かるとすぐにゲームのほうに集中した。

ビクツと体を震わせたのは、きつとお母さんだと思ったから。お母さんに見つかるかと怒られるからね。

「みかんとオレンジってどう違うの？」

唐突な私の質問に、お兄ちゃんは一息間をあげてこう言った。

「知らない」

お兄ちゃんも知らなかった。

日常に、新たな疑問が生まれた瞬間だった。

小学生 3（後書き）

オレンジ…キーワードでしたねえ。

さあ、ここからどうなるのか！私にもさっぱりです（涙

小学校 - 4

7月21日

夏休みが始まった。

小学校初めての夏休みが始まった。と言っても、いつもと変わらず友達と遊ぶ毎日。ただお昼から夕方まで遊べるだけだった。それは私たち一年生だけでなく、他の学年の人も同じだ。どの公園に行っても、見た事のある顔の子供たちが必ずいた。

私は圭と加奈子ちゃんと近所の公園に行った。そこは人気が少なく、好きに遊具を使える公園だった。

「やっぱり人いないね」

圭が言う。私は軽くうなづいた。

私たちはそこから、ブランコや鉄棒で思いっきり遊び始めた。そこでふと、この前の疑問が頭に浮かんだ。

「ねえ、二人に聞きたいことあるんだけど」

二人の視線が私に向けられる。

「みかんとオレンジってどう違うの？」

唐突な質問だったと思う。

しかし圭はあっさりと答えた。

「同じじゃないの？」

「同じ？」

「うん、だってみかんの事英語でオレンジって言うんでしょ？ お母さん言ってたよ」

圭の答えに私は納得がいかなかった。だって、テレビで見たオレンジはみかんとはまったく違ったものだったんだから。大きさも形も、色も少し違って見えた。

「何でこんな事聞いたの？」

圭は私に問いかけた。素直にテレビで見て不思議だったから、と言えばよかったのに、なぜか私の口からは違うものが出てきた。

「別に、なんとなくだよ」

家に帰ると、また家の中がうるさかった。

知らない靴がたくさんある。またお兄ちゃんの友達が来てるのだろうか。

私の足は、リビングへとまっすぐ向かっていった。

「あ、お邪魔してまーす」

私を見たお兄ちゃんの友達は、きちんと挨拶をしてきた。私もそれにきちんと対応する。その後すぐ、私は自分の部屋に入った。電気をつけ、ベッドに飛び込む。

なんだ、島岡君はいないのか。

心の中で浮き出た言葉。そんな考えに少し戸惑う。別に会えなくてもいいじゃないか。私のあの人は何の関係もないのだ。

友達の妹と兄の友達、ただそれだけ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3308a/>

オレンジ

2010年12月21日03時13分発行